製本のススメ　Vol. 204

今年の梅雨は早々と 6 月に明けてしまいましたね。毎年暑さが増しているような気がします、温暖化は深刻です。節電といわれても　暑さには勝てません。首に冷却タオルを巻いたり　マイ扇風機を持参したりと頑張ってはいますがやはり節電にも限度がありますね。夏バテしないように注意しましょう。

今回は「本格的に見返し」のお話です

オンデマンド印刷が主流になりつつある昨今ですが、それでもある程度の物は作りたいという人も多く最近上製本の依頼や問い合わせが増えています。そこで　何回かこのススメでも登場している「見返し」について　再度お話をいたします。

見返しの役割は何と言っても表紙と本文の繋ぎです。上製本加工では表紙と本文は全く別のラインで加工され最後に見返し用紙で接着されるわけです。その為　丈夫であることが求められます。紙自体が弱いと大変壊れやすく　仕上りも良くありません。紙の種類や本の大きさにもよりますが四六ベースで　100k～200k程度の物が良いと思います。

次に表紙の反り調整です。上製本の表紙は芯材に表側を貼った際に外側へ反ってしまいます。その反りを見返し用紙で内側へ引っ張る事により　反りの無い表紙が出来上がります。その為には、紙の強度が必要で、先に書いたような厚みの物が必要です。

さらに見返しは本全体のイメージも決めます。学術書のような物は白い見返しで構いませんが、句集や自分史などの冊子は見返しの紙を変えるだけで、趣のある本になります。本文用紙を決める際には、全体のイメージも考慮した見返し用紙であると良いですね。合わせて花布（ﾊﾅｷﾞﾚ）や栞紐の色なども、冊子によっては決めておくと良いと思います。

見返しという部品は無線綴冊子にも使われますが　この場合は強度重視よりも　見た目重視です。しかしながら小口を糊で接着するため　薄い用紙は不向きです。四六ベースで 100k～130k程度が望ましいと思います。

Teabreak

土用の丑の日にウナギは、平賀源内や太田蜀山人のキャッチコピー説が有力ですが実はそれより前に　うなぎ屋の春木屋善兵衛さんのお店に殿様から蒲焼の大量注文が入り、さすがに 1 日では作り切れないので子丑寅の三日間で作ったそう。しかし冷蔵庫の無い時代　納品時には丑の日に作ったものだけが、美味しく食べられたというエピソードから土用の丑にはウナギの蒲焼という風習が定着していったそうです。

弊社 HP は http：//www.isekiseihon.com
facebook は「井関製本の日々」　　by（株）井関製本